

18 世紀後半から 19 世紀初頭のプラハの音楽活動について

- パフタ伯爵家の管楽アンサンブル -

(音楽教育講座) 市川 克明

Music activity from the second half of the 18th century to the beginning of 19th century in Prague - The wind ensemble of the Count Pachta -

Katsuaki ICHIKAWA

(平成 29 年 10 月 31 日受理)

「18 世紀はボヘミア人の移住の時代」¹、また、チャールズ・バーニー Charles Burney (1726-1814) によれば「ボヘミアはすべてのドイツ人の国、おそらくヨーロッパで一番音楽的」である²。とりわけ、18 世紀後半から 19 世紀前半にかけ、現チェコ共和国内のボヘミア・モラヴィア地域から非常に多くの作曲家、演奏家が現れ、ドイツ語圏はもとよりフランスあるいはイギリスにおいても活躍していた。

本稿は、チェコ国立博物館附属音楽図書館所蔵のパフタ伯爵家に伝わっていた手稿楽譜を手掛かりに³、同伯爵家の音楽に深く関与した二人の作曲家フランティシェク・クサヴェル・ドゥシェク František Xaver Dušek (1731-1799)、およびヴァーツラフ・ヴィンツェンツ・マシェク Václav Vincenc Mašek (1755-1831) のハルモニウムジーク (管楽アンサンブル作品) を概観し、今後の研究活動の指針をまとめたものである。

はじめに、18 世紀後半から 19 世紀初頭のプラハにおける音楽活動を概観し、そしてドゥシェク、マシェクの生涯と音楽活動、パフタ伯爵家のハルモニウムジークを取

り上げる。さらに、特異な編成であるマシェクの管楽アンサンブル付きのチェンバロ協奏曲の現存する楽譜とその伝承について最新の研究をまとめる。

なお、本稿は平成 29 年度愛媛大学外国派遣研究員として約 3 ヶ月にわたりプラハに滞在し研究を行った報告である。

1. 1800 年前後のプラハの音楽活動

「移住の時代」

バロック時代後期、ドレスデン宮廷で活躍したヤン・ディスマス・ゼレンカ Jan Dismas Zelenka (1679-1745) をはじめ、ウィーンで活躍したレオポルド・ガスマン Leopold Gassmann (1729-1774)、ヤン・クシティテル・ヴァニユハレ Jan Křtitel Vaňhal (1739-1813)、イシー・ドゥルジェツキー Jiří Družecký (1745-1819)、レオポルド・コジェルフ Leopold Koželuh (1747-1818)、パヴェル・ヴラニツキー Pavel Vranický (1756-1808)、フランティシェク・クラマージュ František Kramář (1759-1831)、ヴォイティェフ・マチャージュ・イーロヴェツ Vojtěch Matyáš

Jiřovec (1763-1850)、ベルリンのフランティシェク・ベンダ František Benda (1709-1786)、ゲオルク・アントン・ベンダ Georg Anton Benda (1722-1795)、マンハイムのヨハン・ヴェンツェル・シュターミッツ Johann Wenzel Stamitz (1717-1757)、南ドイツのちにボン宮廷楽長のヨーゼフ・レイハ Josef Rejcha (1717-1795)、南ドイツのちにシュヴェリー宮廷楽長のアントニオ・ロゼッティ Antonio Rosetti (ca. 1750-1792)、イタリアで活躍したヨーゼフ・ミズリヴェチェク Josef Mysliveček (1737-1781)、パリのアントニン・レイハ Antonín Rejcha (1770-1836) など非常に多くのボヘミア出身の作曲家、あるいは宮廷楽長が歴史に名を残している。

演奏家としては、ヨーロッパ中で知られ、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770-1827) と五重奏やホルンソナタ F-Dur op. 17 を作曲者と共演したホルン奏者、ヤン・ヴァーツラフ・シュティヒことジョバンニ・プント Jan Václav Stich / Giovanni Punto (1746-1803)、同じく五重奏を作曲者およびプントと共演したクラリネット奏者ヨーゼフ・ベアー Joseph Beer (1744-1812)⁴、ヨーロッパ各地をピアニストとして演奏旅行し主としてピアノ曲を残したヤン・ラディスラフ・ドゥシーク Jan Ladislav Dusík (1760-1812)⁵ などがよく知られている。これらの演奏家の一代前では、プントの師でありホルンの右手の閉塞音楽法の確立に貢献したとされるドレスデンのホルンの名手、ヨーゼフ・アントン・ハンペル Anton Joseph Hampel (ca.1710-1770) もプラハ出身の音楽家として忘れることはできない。このように他地域で評価され受け入れられたボヘミア出身の音楽家がこれほど多い時代は 18 世紀においてはなく、「移住の時代」というのは極めて適切な表現である。

プラハの貴族のための音楽

当時、プラハにはハプスブルク家の重鎮である貴族たち、キンスキー、シュヴァルツェンベルク、ヴァルトシュテイン、ロプコヴィッツ、リーヒテンシュタインの各侯爵家、クラム＝ガラス、パフタ、トゥーンの各伯爵家などの邸宅が存在した。これらは、現在では国議会、チェコ共和国の省庁、諸外国の大使館、美術館、演奏会場などプラハ市内で重要な建造物として利用されている⁶。

これらの貴族と音楽家との交流はよく知られており、たとえば、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) はプラハを訪れた際、1787 年 1 月 12 日、庇護者であるトゥーン伯爵にヴァルタヴァ川西岸のマラー・ストラナ（小地区）にある邸宅に招かれ、親しくもてなされている様子を手紙に記している⁷。ヴァルトシュテイン家やロプコヴィッツ家とベートーヴェンとの関係はよく知られているが⁸、6 回にわたるプラハ滞在時⁹、貴族たちに何度も招待を受けている¹⁰。

これらボヘミア貴族の中で、音楽の分野で特に重要な役割を果たしていたのは、自身が音楽活動もしていたヨーハン・ヨーゼフ・フィリップ・パフタ・フォン・ライホーフエン伯爵 Johann Josef Philipp Pachta von Rayhofen (1723-1822) である¹¹。

2. ドゥシークとマシーク

「移住の時代」にボヘミア領内に残った音楽家の中で、F. X. ドゥシークと V. マシークは、プラハの音楽活動、特に自身を含め、多くの国内外の演奏家による演奏会を主催するなど、極めて重要な役割を果たした。また、ドゥシークはシンフォニーの作曲の際、パフタ伯爵家とクラム＝ガラス伯爵家の宮廷楽団と協力関係にあったと言われる。

フランティシェク・クサヴェール・ドゥシークとその生涯

F. X. ドゥシークは 1731 年、現在のポーランド国境に近い北東ボヘミアの小村ホティエヴォルキ Chotěborky u Jaroměře に生まれ、ヴィーンでゲオルク・クリストフ・ヴァーゲンザイル Georg Christoph Wagenseil (1715-1777) に師事、1770 年にプラハに戻った後は、主にピアノ教育者、作曲家として活動した。1776 年、弟子の一人であった、ヨセファ・ハムバッヒェル（結婚後はドゥシコヴァー） Josepha Hambacher (1754-1824) と結婚した。夫妻は後にプラハのスミーホフ地区のベルトラムカ荘に居を構え、18 世紀の後半、様々な音楽アカデミー・演奏会を企画、多くの音楽家が同家を訪れるなど、プラハの音楽活動の中心となった。とりわけ、モーツァルトとの関係は有名で、アリア "Ah, lo previdi - Ah, tinvola agl'occhi miei" KV 272 をヨセファ・ドゥシコヴァーのために作曲¹²、その後も夫妻はモーツァルトと親しく交流し、1787 年、1791 年、2 度にわたる訪問の様子はよく知られている。ドゥシークはシンフォニー、コンチェルト、室内楽など

を残し、その多くはプラハの音楽図書館に所蔵されている¹³。

ヴィンツェンツ・マシェクとその生涯

V. マシェクは 1755 年、西ボヘミア、プラハとビルゼン
の中間に位置するツヴィーコベツ Zvíkovec で生まれ、牧
師であった父に音楽の手ほどきを受けた後、プラハでフ
ランティシェク・クサヴェル・ドウシェク František
Xaver Dušek (1731-1799) にクラヴィーアを、ヨセフ・セ
ゲル Josef Seger (1716-1782) に作曲を師事した。マシェク
は、弟子でグラスハーモニカの名手であった マリー・ヨ
ハンナ・ネポムツェナ・プラウシン（結婚後はマシェコ
ヴァー） Marie Johanna Nepomucena Prauschin (1764-
1808) と結婚、夫妻で演奏旅行を行った¹⁴。プラハの著名
な著述家でストラホフ修道院の司書であったゴットフリ
ート・ヨーハン・ドラバチ Gottfried Johann Dlabacž
(1758-1820) によれば、マシェク自身はピアノ、および夫
人同様グラスハーモニカの名手であり¹⁵、1787 年¹⁶、夫
妻でボヘミアの貴族であるヴィルピ伯爵とともに、ドレ
スデン、ハレ、ライプツィヒ、ハンブルク、コペンハー
ゲンへ演奏旅行を行い大きな評価を受けた¹⁷。1795 年か
らはプラハ市内ヴルタヴァ川西岸のマラー・ストラナに
ある聖ミクラーシュ教会の合唱監督に就任し、1831 年に
亡くなるまでその地位にあった。

作品は、7 曲のシンフォニー、8 曲のピアノコンチェ
ルト、室内楽、ピアノ曲、2 つのオペラ¹⁸、教会音楽¹⁹、
バレエ・パントマイム音楽、などを数多く残しているが²⁰、
とりわけ重要なのは、当時ヴィーンを始め中部
ヨーロッパで流行していたグラスハーモニカの作品群
で、プラハの音楽学者イシー・ミクラーシュ Jiří Mikláš
(1965-) の作品目録では、消失したグラスハーモニカと管
弦楽のコンチェルト Mik. VM IV:5²¹ やグラスハーモニカ
を含む室内楽作品として 6 曲が記載されている²²。グラ
スハーモニカは、アメリカのベンジャミン・フランクリ
ンにより 1761 年に発明され、アルモニカ Armonica と名
づけられ、瞬く間にヨーロッパにも広まったが、ヨー
ロッパでは Harmonika と称され、1802 年出版のハインリ
ヒ・クリストフ・コッホ Heinrich Christoph Koch (1749-
1816) の音楽事典でも実に 6 ページを割き詳述している²³。

マシェクは、聖ミクラーシュ教会の合唱監督のほか、
1780 年代から 1810 年ごろまでプラハの音楽界を牽引し、
数多くの演奏会を企画し、また音楽教育者としても重要
な足跡を残している。マシェク夫妻には 17 人の子どもが
おり、成人した 12 名のうち、第 10 子のカシュパル・ニク
ラス・マシェク Kašpar Mašek (1794-1873) はリュブリャ
ナで歌劇場の指揮者として、末子のアルビーノ・マシェ
ク Albín Mašek (1804-1878) は聖ミクラーシュ教会を始め
プラハの教会で聖歌隊監督を務めている。

特に重要なのは、マシェクの交友関係である。1790 年
代から 1800 年代にかけマシェクの周辺にはプラハ内外を
代表する音楽家たちが集まった。マシェクは 1781 年の結
婚後、ヴルタヴァ川東岸の新市街地区で数度にわたり移
転し、最終的に 1795 年、聖ミクラーシュ教会の合唱監督
に就任しヴルタヴァ川西岸のマラー・ストラナのプファ
ー小通り Pfarrgasse 155 番に居を構え²⁴、没するまで居住
していた²⁵。この住居は現在のトゥルノフスカ通り
Thunovská 178/10 にあたり、現イギリス大使館（旧トゥ
ーン伯爵邸）のすぐ近くで、その建造物は現存している²⁶。
1802 年、マシェクはこの住宅にピーダーマイヤーを
思い起こさせる一種の音楽サロンを設立、「*Ein
Kunstkabinett*」 「芸術の小部屋」と名付けた²⁷。マシェク
と深い交友関係にあったのは、プラハの著名な作曲家ヤ
ン・ヴァーツラフ・トマーシェク Václav Jan Křtitel
Tomášek (1774-1850)、自身が作曲家でもあるライプツィ
ヒの出版者フランツ・アントン・ホフマイスター Franz
Anton Hoffmeister (1754-1812)、ヨーロッパ各地で活躍し
た作曲家で当時プラハに滞在していたゲオルク・ヨーゼ
フ・フォーグラール Georg Joseph (Abbé) Vogler (1749-
1814)、ドイツの著名な音楽理論家ヨーハン・ニコラウ
ス・フォルケル Johann Nikolaus Forkel (1749-1818)、ジョ
バンニ・プントなど現在でも名を残している音楽家たち
も含まれている。1801 年 5 月 16 日の娘 Thekla Georgia
Amalia Antonia (1801-1847 以降) の誕生に際し、フォーグ
ラー、プント、ドレスデンの当時著名な作曲家ヨハン・
ゴットリープ・ナウマン Johann Gottlieb Naumann (1741-
1801) に代父を務めてもらっているが、ドレスデンの音楽
監督のナウマンがその 3 日後にプラハを後にしドレスデ
ンに戻り、また、3 人の音楽監督²⁸ が代父を務め、
「近々会うことになっている 4 人めの音楽監督ホフマイ

スターがいなことが残念²⁹」であることをホフマイスター出版社の共同経営者アンブロジウス・キューネル Ambrosius Kühnel (1771-1813) に書き送っている³⁰。この例は、マシェクの家族が公私にわたり多くの著名な音楽家たちと深く交流していたことを証明している。

この中で、ヨーロッパ中で知られていたホルン奏者のジョバンニ・プントは、最晩年はマシェク家のすぐ近くに居住しもっとも近い関係にあったと推測される。事実、彼の死去に際しては葬儀の音楽を担当している³¹。

プントは、1746年、プラハから東方90キロメートルに位置するジェフシツェでヤン・ヴァーツラフ・シュティッヒとして生まれ、ホルン奏者として偽名であるジョバンニ・プントの名で有名になった。モーツァルトやベートーヴェンとも親交があり、彼らの作品をしばしば演奏したことはすでに述べた通りである。また、作曲家としてもホルンのためのコンチェルトを始め、数多くの楽曲を残している。

1801年、プントは故国であるボヘミアのプラハに戻り演奏会を開き、翌年パリへ短期間の演奏旅行を行い、その後プラハに戻るが胸膜炎を患い、1803年2月15日、マラー・ストラナの宿屋 *U arcivévody Karla* で死亡した。マシェクの自宅の近くにある聖ミクラーシュ教会で葬儀が行われ、その際にはモーツァルトのレクイエムが演奏された³²。

マシェクの「音楽アカデミー」

ドゥシェクは1799年に亡くなるまでマラー・ストラナからほど近い、スミホフ地区のベルトラムカ荘に住んでおり、既述のようにプラハにおける音楽活動の一つの中心であった。ドゥシェクの教え子であるマシェクは「音楽アカデミー」の伝統を引き継ぎ、当時のプラハの音楽生活を豊かなものとした。1791年3月21日に王立国民劇場で開催された「音楽アカデミー」の例を紹介する。

*Mit hoher und gnädigster Bewilligung
Wird Morgen Montag den 21ten März 1791,
Herr Vinzenz Masche und Madame Maschek
die Ehre haben
im königl. Nationaltheater
Eine Musikalische Academie
Vorkommende Stücke:*

1. *Symphonie.*
 2. *Ein Adagio Sonate auf der Harmonika nebst einen Allegro mit Abwechslung eines Echo mit blasenden Instrumenten, gespielt von Madame Maschek.*
 3. *Ein großes Concert auf dem Forte-Piano, mit dem ganzen Orchester nebst 4 Horn Trompeten und Pauken, gespielt vom Herrn Maschek.*
 4. *Variation auf der Harmonika und Forte-Piano, gespielt von Hr. und Md. Maschek.*
 5. *Ein Stück von einer Symphonie.*
 6. *Ein Adagio ganz allein auf der Harmonika, dann ein großes Allegro eben auf der Harmonika mit den ganzen Orchester, gespielt vom Herrn Maschek.*
 7. *Eine Fantasie Sonate auf dem Forte-Piano, vereinigt mit dem Carillon, gespielt vom Herrn Maschek.*
 8. *Duet auf zwey Harmonika, gespielt von Hr. und Mad. Maschek.*
- Den Beschluß macht ein Allegro von einer Symphonie.*
- NB. Alle vorkommende Stücke sind ganz neu Componirt von Herrn Vinzenz Maschek.*³³

第2曲めは管楽アンサンブル付きのグラスハーモニカ作品で、この編成は他にほとんど例がない。楽譜は現存しないが、ミクラーシュの作品目録では、Mik. VM XVIII: 5 が与えられている³⁴。シンフォニー、ピアノコンチェルト、ピアノ作品、グラスハーモニカ作品、さらに夫妻によるグラスハーモニカ二重奏など非常にバラエティに富んだ演奏会となっている。すべての作品はマシェク自身の新作であることも記載されている。このような「音楽アカデミー」が定期的に行われ、18世紀末から19世紀初頭のプラハの音楽生活を豊かにしていた。ドゥシェク、マシェク以外では、コジェルフ、トマーシェク、およびマシェクの弟子であるヤン・ネポムク・ヴィターセク Jan Nepomuk Vítěšek (1771-1839)³⁵ などの作曲家たちは大きな役割を果たした³⁶。

3. ハルモニウムジーク

管楽アンサンブルの一形態である Harmoniemusik 「ハルモニウムジーク」は、1760年前後に成立した渡韓がられ、特に1782年4月にヴィーンで「皇帝のハルモニウム」 *Kaiserliche Harmonie* が成立した後、多くの貴族が同様の

アンサンブルを設立し、1840 年頃までヨーロッパ各地、とりわけドイツ語圏で流行していた。特に、管弦楽を有することのできない小さな宮廷による管弦楽の代替として、婚礼、葬儀、祝祭、重要人物の来訪時、あるいは当主の趣味、例えば狩りや船遊びといった際に演奏されるなど様々な例が見られるが、王侯貴族のみにとどまらず、街の宿屋、飲食店、路上など様々な場所で演奏されていた³⁷。

「夏の季節には、天気のよい日はほぼ毎日路上での小さな演奏が、時折午前 1 時、あるいはそれ以降まで行われる。(中略) それらの音楽は、イタリアやスペインのようにギターやマンドリン、または別の楽器が歌を伴奏する、というのではなく、(中略) 多くの場合はオペラからの楽曲を三重奏、四重奏の管楽器で演奏するもので、しばしばオーケストラ作品も演奏され、大きな交響曲を聴いているような気持になる。

(中略) 大きな拍手を受け、場合によっては繰り返し、また別の場所で演奏する。」³⁸

これは、1794 年のウィーンでの管楽アンサンブルの路上での演奏の様子を描いたものである。おそらく、プラハにおいても同様に管楽アンサンブルは好まれ、市民たちに「夕べの音楽」を提供していたと思われる。演奏会として行われる場合には時としてそのチラシやプログラムが残ることもあるが、こうした路上でのあるいは飲食店などでの演奏は記録に残ることはほとんどない。しかし、公式の演奏会だけではなく、このような路上で、飲食店や庭園、あるいは個人の住宅で、貴族の食卓で、管楽アンサンブルが特に好まれたのは疑いようがない。

基本的な編成は、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットを 2 本ひと組で使用する管楽八重奏であるが、特にモーツァルトの 2 曲のセレナーデ *Es-Dur* KV 375、*c-Moll* KV 384a は今日でも重要なレパートリーである。これは上記の皇帝のハルモニウムジークの編成によるものであり、非常に多くの楽曲が残されている。しかし、2 本ずつのオーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットの八重奏が「標準」である、との記述にしばしばでくわすが、実際にはその編成は極めて多様である。クラリネット、ホルン、ファゴットを 2 本ずつ使用するベ

ートーヴェンの六重奏 *Es-Dur op.81* は極めて有名な例であるが、ロゼッティを始めとするヴァラーシュタイン宮廷の作曲家が好んだフルートやコントラバスを含む 10～12 重奏、ベートーヴェンの交響曲第 7 番の編曲のようにコントラファゴットを含むもの、トランペットやトロンボーンを含むもの、シュヴァルツェンベルク伯爵家に伝わっていたクラリネットの代わりにイングリッシュホルンを取り入れた楽曲、同じくシュヴァルツェンベルク伯爵家に伝承した 2 本のホルンと 6 本のファゴットなど³⁹、その楽器編成は多種多様である。したがって、ハルモニウムジークは「単数あるいは複数の『一対の管楽器』とバス楽器 (通常はファゴット) を基本編成とし、内声部としてホルンを用いる管楽アンサンブル」、と定義できる⁴⁰。

ハルモニウムジークのタイトルは、プラハに伝わる楽曲の場合にはその多くは *Partia*、*Partia* あるいは *Partita* と名付けられているが、このほかにも *Serenade*、*Divertimento*、*Cassation* など様々である⁴¹。

ミズリヴェチェック、ドゥルジェツキー、ロゼッティ、クラマージュ、イーロヴェツ、そしてマシクなど、ボヘミア出身の音楽家たちも数多くの作品を残しており、今日でも演奏のレパートリーとなっている曲もある。18 世紀末から 19 世紀初頭にはハルモニウムジークはブームとなり、オリジナル楽曲はもとより、モーツァルト、ベートーヴェン、ロッシニ、ヴェーバーのオペラ、あるいはベートーヴェンのシンフォニーからの編曲作品など様々なジャンルのハルモニウムジークが生み出された。このような作品を生み出した当時を代表する演奏家でもっとも有名なオーボエ奏者の一人で、プラハのパフタ伯爵家でも仕えていた⁴²、ヤン・ネポムク・ヴェント *Jan Nepomuk Vent* (1745-1801)、およびヨーゼフ・トリーヴェンゼー *Josef Triebensee* (1746-1813)、クラリネット奏者、ヴァーツラフ・セドラーク *Václav Sedlák* (1776-1850) はボヘミア出身である。

また、ハルモニウムジークはボヘミア兄弟団の中の音楽家により新大陸にも伝えられ、19 世紀前半、特に北アメリカ東海岸の一部では広く演奏されていた⁴³。

プラハにおけるハルモニウムジーク

記述の通り、ドゥシェク、マシェクの管弦楽作品はプラハの有力貴族であるパフタあるいはクラム＝ガラス伯の宮廷楽団と密接な関係がある。パフタ伯爵家に伝承され、現在チェコ音楽図書館に所蔵されているドゥシェクの管楽パルティータは37曲⁴⁴、マシェクの管楽パルティータは24曲である⁴⁵。

このほか、同図書館所蔵のパフタ伯爵家伝承の管楽パルティータには、フランチェスコ・アレッシオ Francesco Alessio (?-1780)⁴⁶、フランツ・アスペルマイヤー Franz Aspelmayr (1728-1786)⁴⁷、フランティシェク・クサヴェール・ブリクシ František Xaver Brixi (1732-1771)⁴⁸、カール・ディッターズ・フォン・ディッターズドルフ Carl Ditters von Dittersdorf (1739-1799)⁴⁹、イシー・ドゥルジェツキー⁵⁰、アントニン・ラウベ Antonín Laube (1718-1784)⁵¹、ヴァーツラフ・ピフル Václav Pichl (1741-1785)⁵² の作品など、ドゥシェク、マシェクの作品を含め約260曲が残されている⁵³。

注目すべき点は、ドゥシェクの管楽パルティータのいくつかは作曲年代の特定が可能で、その時期は1762年から1764年である。これは、ハイドンなどの作品とともにハルモニウムジークとしてごく初期の例である。それは、既述のウィーンの「皇帝のハルモニー」に約20年先んじている。この長いハルモニウムジークの歴史は、ボヘミアにおける管楽パルティータの隆盛にもつながっている。1800年4月9日の「一般音楽新聞」 *Allgemeine musikalische Zeitung* はボヘミア地方の音楽状況を伝える中で、その時点で現存していたパフタ伯爵家のハルモニウムジークに関して次のように言及している。

多くの騎士達は卓越した楽師からなる楽団を有していたが、その多くは管楽器奏者からなっていた。現時点で唯一残っているのは、ヨーハン・パフタ伯爵のものである⁵⁴。

パフタ伯爵家のハルモニウムジークは、1762年に設立されたとされ、少なくとも1815年までは存在していた。ヤン・パフタ伯爵自身1780年代にはハルモニウムジークのための交響曲を作曲している。同様に、クラム＝ガラス伯爵家のハルモニウムジークはフリードランド Frýdlant 城を中心として演奏されていたが、同宮廷楽団

ハルモニウムジークの基本編成は、2本ずつのオーボエ、ホルン、ファゴットに加え1本のフルートが入れることが多く、パフタ宮廷のためにこの編成でドゥルシェツキーやアスペルマイヤーなどの作品が残されている。同様に、ドゥシェクの47曲の管楽パルティータは、2本のオーボエ、2本のホルン、1本あるいは2本のファゴットの編成で、クラリネットは全く用いられていない⁵⁵。ドゥルシェツキーの管楽パルティータは、2本のクラリネットを含む「標準型」ハルモニウムジークである⁵⁶。さらに、マシェクの管楽パルティータでは、バセットホルンを使用したものもある⁵⁷。

その後の伝承

パフタ伯爵家の管楽作品の手稿譜は、その後、プラハ音楽院 *Pražská konzervator*⁵⁸、さらにプラハ芸術協会 *Umělecká beseda*⁵⁹ により伝承された。芸術協会は音楽や文学などの部門を有し、19世紀後半から20世紀にかけて、また現在でも、音楽、芸術活動の中心として教育、演奏会企画など積極的な活動を行っている⁶⁰。チェコスロヴァキア社会主義共和国成立後、同芸術協会所蔵の手稿譜を始め、チェコ国内の多くの楽譜資料が1949年にチェコ国立博物館附属音楽図書館に集められた⁶¹。

4. マシェクの管楽アンサンブル付クラヴィーア協奏曲

マシェクの中でとりわけ異彩を放っているのが、管楽アンサンブル付きのチェンバロあるいはピアノを独奏とする協奏曲 Mik. VM III:1-7 である⁶²。管楽アンサンブルは、基本的にクラリネットやホルンなどの管楽器を2本ずつの組み合わせにするハルモニウムジークで、通常の協奏曲では管弦楽の部分の役割を果たしている。こうした編成のクラヴィーア協奏曲の例は極めて少なく、1800年前後の作品では、マシェクによるもの以外ではドゥルジェツキーによるものが1曲確認できるのみである⁶³。

ミクラーシュによる目録では、独奏チェンバロと管楽五重奏 (2Cl, 2Hn, Fg) のためのパルティータ3曲 Mik. VM III: 1-3、2台のチェンバロと管楽六重奏 (2Cl, 2Hn, 2Fg) のための小協奏曲あるいはパルティータが2曲 Mik. VM III: 5-6、3台のチェンバロと管楽七重奏 (2Ob, 2Cl, 2Hn, 1Fg) ための協奏曲1曲 Mik. VM III: 7、および四手連弾ピアノ独奏と管楽八重奏 (2Fl, 2Cl, 2Hn, 2Fg) のための協奏曲が1曲 Mik. VM III: 4 である。このうち 協奏曲 Es-

Dur Mik. VM III: 5 は第1 ピアノのパート譜のみ現存しており、主題が極めて類似しており、明らかに Mik. VM III: 6 の編曲作品である⁶⁴。

作曲技法的には特に目新しいことはなく、典型的な古典派協奏曲の様式で、第1楽章に序奏を有する協奏曲は3曲 (Mik. VM III: 4, 5, 6)⁶⁵、終楽章がロンド形式の協奏曲は6曲 (Mik. VM III: 2, 3, 4, 5, 6, 7)、残りの1曲 (Mik. VM III: 1) は舞曲 *Inglese* を取り入れている。注目点は、緩徐楽章に *Romance* をしている楽曲が2曲あることである。本来、声楽曲に用いられることの多かった *Romance* は古典派時代には、交響曲、協奏曲の緩徐楽章に採用されることがしばしば見られたが、アントニオ・ロゼッティを始めとするボヘミア出身の音楽家の協奏曲に多く見られる⁶⁶。また、協奏曲の第2楽章に *Menuetto* 楽章を挿入 (Mik. VM III: 3) するのはほとんど例がない⁶⁷。

全7曲で唯一出版楽譜が現存している四手連弾のための協奏曲 F-Dur Mik. VM III: 4 は四手連弾のためのソナタ *Sonate pour le Piano-forte à quatre mains* F-Dur VM XIII: 5 の編曲作品である⁶⁸。どちらも 1802 年にライプツィヒのブライトコプフ&ヘルテル社より出版されている⁶⁹。

伝承について

唯一の出版楽譜としてプラハの国立音楽図書館に所蔵されている四手連弾ピアノのための協奏曲 F-Dur VM III: 4 の2種類の楽譜は同一である⁷⁰。この曲の確認できる最初の演奏記録は、1821年あるいは1822年、シュトラスブルクからの報告で、「マシエクのハルモニー伴奏のピアノフォルテのためのコンチェルティーノがジョルディ氏により」演奏された記録が残っている⁷¹。なお、これは同地の第2ディレタント協会 *Der zweyte Dilettanten-Verein* 主催の、1821年10月28日から1822年3月24日までの第12回(年)目の演奏会に関する報告に記載されている。毎日曜日の午前11時から午後1時まで宿屋「ツム・ガイスト」*Gasthof zum Geist* で開催されていた演奏会シリーズ中の演奏会である⁷²。

独奏コンチェルト Mik. VM III: 1-3 の筆写譜は3曲とも2種類伝承されている。一つめは、現在、チェコの作曲家ズデニェク・シェスターク Zdeněk Šesták (1925-) 氏の個人所有で、コピーリストは不明、パート譜である⁷³。本来の保管されていた場所は、プラハの北方の街、ツィー

トリビ *Citoliby* でパフタ・フォン・ライホーフェン宮廷の所蔵楽譜であった。1720年にパフタ伯爵家は、ツィートリビに不動産を取得している。3曲の楽譜の現在の所有者シェスターク氏はツィートリビ出身で、なんらかの関係でこれらの手稿譜を入手したと思われる⁷⁴。

この3曲のもう一方の筆写譜の現在の所蔵場所は、プラハにあるチェコ国立図書館で⁷⁵、これらはクラリネット奏者でプラハ・コレギウム・ムジクムのメンバーであったアントニン・ミスリーク Antonín Myslík (1933-1983) 氏により筆写されたスコアである。いずれもタイトルは *PARTITA* 「パルティータ」である。このうちパルティータ A-Dur Mik. VM III: 2 はミスリーク氏によるスコア、パート譜のオリジナル筆写譜である⁷⁶。なお、氏本人の署名とともに、1971年10月16日の日付が記載されている。

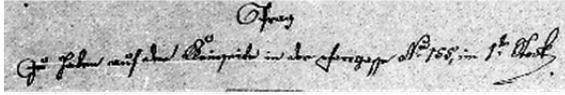
さらにミスリーク氏による筆写譜をマイクロフィルム化した3曲のコピー楽譜が存在する。すなわち、パルティータ D-Dur Mik. VM III: 1⁷⁷ は1977年5月9日、パルティータ A-Dur Mik. VM III: 2⁷⁸、パルティータ Es-Dur Mik. VM III: 3⁷⁹は、1966年9月23日の日付がミスリーク氏の署名とともに記載されている。興味深いことに、協奏曲 A-Dur Mik. VM III: 2 の署名には日付とともに *Provenience CITOLIBY* との記載があり⁸⁰、シェスターク所蔵のパート譜を筆写したものと類推できる。

このようにチェコ国立図書館には、3曲4種の手稿譜が所蔵され、これら3曲は、1978年にミスリーク氏自身がクラリネットを担当するプラハ・コレギウム・ムジクムによりレコード録音されている⁸¹。

協奏曲 A-Dur Mik. VM III: 2 は上記のようにミスリーク氏による2種類の楽譜が残されているが、オリジナル資料はファゴットが1本であるのに対し、マイクロフィルムからの楽譜は、第2ファゴットが書き加えられている。ほとんどは第1ファゴットのオクターブ下であるが、場合によっては3度で重ねられているなど、ミスリーク氏自身が実演の際に編曲した可能性が高い。同様に残りの2曲のマイクロフィルム楽譜でも2本のファゴットに書き直されている⁸²。

コンチェルティーノ Es-Dur Mik. VM III: 6 は自筆譜がベルリンのドイツ国立図書館に所蔵されている⁸³。この

楽譜はパート譜で、タイトルページに次のような記述がある。



Prag

Zu haben auf der Kleinseite in der Pfungasse N155, im 1^{ten} Stock.

「プラハ 小地区⁸⁴、プファルガッセ 155 番、1 階」

この住所は、マシェクが 1795 年から居住しており、「芸術の小部屋」と称した場所である。街区番号変更により、1805 年に 178 番に変更されているため、この楽曲はこの 10 年間の間に作曲されたと考えられる⁸⁵。

コンチェルティーノ Es-Dur Mik. VM III: 6 は、ベルリン所在の楽譜以外に、この曲の編曲作品であると思われるパルティア Es-Dur Mik. VM III: 5 とともにチェコ音楽図書館に所蔵されている⁸⁶。どちらも以前の所蔵場所は北東ボヘミアのポーランド国境に接している街ブroumov Broumov の修道院⁸⁷ である⁸⁸。同修道院にはイタリアのアントニオ・ボローニ Antonio Boroni (1738-1792)、ディッターズドルフ、ブリクシ、ラウベ、ヨハネス・ロヘリウス Johannes Lohelius (1724-1788)、ヤン・ザフ Jan Zach (1713-1773) などの作品が所蔵されているなど、18 世紀から 19 世紀にかけ活発な音楽活動が行われていた⁸⁹。

3 台のチェンバロのための協奏曲 D-Dur Mik. VM: III: 7 もベルリンのドイツ国立図書館に所蔵されている⁹⁰。3 台のチェンバロを独奏とし管楽八重奏を伴奏にする、という極めて特異な編成の楽曲であるが、1976 年にレコード録音もされている⁹¹。タイトルページには、

*"Concerto. in D. // a. // Tre Clavicembalis. // Oboe
Primo. Oboe Secundo. // Clarinetto Primo.
Clarinetto // Corno Primo. Corno Secundo. // con //
Fagotto. // Del Sigr. Vincenzo Maschek"*

と記載されており、明確にチェンバロが独奏楽器であることが確認できる。コピーストは特定できない。

おわりに

プラハにあるチェコ国立博物館所蔵のハルモニウムジークの楽譜を精査し、18 世紀後半から 19 世紀初頭のボヘミア地方におけるハルモニウムジークの実態を調査した。特に、パフタ伯爵家に伝承したドゥシェクとマシェクのパルティアの手稿楽譜、および、マシェクの管楽伴奏付きチェンバロあるいはピアノ協奏曲のその伝承に焦点を置いて調査結果をまとめた。

本稿は、18 世紀から 19 世紀初頭のプラハあるいはボヘミアにおける豊かな音楽活動と、「移住の時代」に国内にとどまった音楽家とその管楽作品をさらに探求していく上で指針となる成果であり、今後、演奏可能な楽譜を作成し実演を含め紹介していく予定である。

略語：

- Cl. クラリネット
- CZ-Pnm チェコ国立博物館附属音楽図書館 (プラハ)
Praha, Národní muzeum – České muzeum hudby
- CZ-Pu チェコ国立図書館 (プラハ)
Praha, Národní knihovna ČR
- D-B ドイツ国立図書館 (ベルリン)
Berlin, Staatsbibliothek, Deutschland
- Fg. ファゴット
- Fl. フルート
- Hn. ホルン
- Mik. VM イシー・ミクラーシュ氏によるマシェク作品目録
- Ob. オーボエ
- sp. Spalte ページをさらに左右に半分ずつ分けたページ割

参考文献：

- Bělský, Vratislav**, "*Serenate Boeme, partite e nocturni, Antonín Kammel, Jiří Družecký, František Xaver, Dušek, Vincenc Mašek*", Musica Antiqua Bohemica Series I Vol.35, Praha 1958
- Dlabáč, Gottfried Johann**, "*Allgemeines historisches Künstler-Lexikon für Böhmen und zum Theil auch für Mähren und Schlesien*", Prag 1815
- Funač, Jiří**, "*Die musiklexikographische Methode B.J. Dlabáčs und ihre kunstgeschichtlichen Hintergründe*", in: Sborník prací Filozofické Fakulty Brněnské Univerzity, H, Řada hudebněvědná vol. 20 H6, Brno 1971, pp. 63-86
- Ichikawa, Katsuaki**, "*Die Harmoniemusik am Hof von Oettingen-Wallerstein*", Diss., Halle 2015
- Koch, Heinrich Christoph**, "*Musikalisches Lexikon, welches die theoretische und praktische Tonkunst, encyclopädisch bearbeitet, alle alten und neuen Kunstwörter erklärt, und die alten und neuen Instrumente beschrieben, enthält*", Frankfurt 1802
- Komma, Michel**, "*Das böhmische Musikantentum*", Kassel 1960
- Meraviglia-Crivelli, Rudolf Johann**, "*Der böhmische Adel*", Nürnberg 1886
- Mikuláš, Jiří**, "*Vinzenz Maschek (1755-1831) – Život a dílo Vinzenz Maschek (1755-1831) – Life and Work*", Diss., Praha 2011
- Mikuláš, Jiří**, "*Der Prager Komponist Vinzenz Maschek (1755-1831) und Sachsen*", in: *Musiker-Migration und Musik-Transfer zwischen Böhmen und Sachsen im 18. Jahrhundert – Dresden: Institut zur Erforschung und Erschließung der Alten Musik in Dresden 2012*, Dresden 2013, pp. 103-109

楽譜資料：



V. マシエク 四手連弾ピアノのための協奏曲 **F-Dur VM III: 4**
(CZ-Pnm: XIII F 375) タイトルページ



V. マシエク 2台のピアノのための協奏曲 **Es-Dur VM III: 6**
(CZ-Pnm: XXXVIII C 281) パート譜

表：ヴィンツェンツ・マシエクの管楽伴奏付きチェンバロ・クラヴィーア協奏曲

目録	調性	編成	種類		伝承	所在地
III:1	D	Cemb. Solo Cl. I, II in A Hn. I, II in D Fg.	筆写譜	パート譜	チートリビ, アルノシュト・パフタ伯爵宮廷楽団所蔵	ズデニェク・シェスターク 個人所有
			筆写譜 (1977. 5. 9, コピイスト: アントニン・ミスリーク)	スコア譜	アントニン・ミスリーク	CZ-Pu: 59 XR165 (旧: R 2950) 《マイクロフィルムからのコピー》
III:2	A	Cemb. Solo Cl. I, II in A Hn. I, II in A Fg.	筆写譜	パート譜	チートリビ, アルノシュト・パフタ伯爵宮廷楽団所蔵	ズデニェク・シェスターク 個人所有
			筆写譜 (1971. 10. 16, コピイスト: アントニン・ミスリーク)	スコア譜・パート譜	アントニン・ミスリーク	CZ-Pu: 59 R 4099
			筆写譜 (1966. 9. 23, コピイスト: アントニン・ミスリーク)	スコア譜	アントニン・ミスリーク	CZ-Pu: 59 XR164 (旧: 59 R 2949) 《マイクロフィルムからのコピー》
III:3	Dis	Cemb. Solo Cl. I, II in B Hn. I, II in Dis Fg.	筆写譜	パート譜	チートリビ, アルノシュト・パフタ伯爵宮廷楽団所蔵	ズデニェク・シェスターク 個人所有
			筆写譜 (1966. 9. 23, コピイスト: アントニン・ミスリーク)	スコア譜	アントニン・ミスリーク	CZ-Pu: 59 XR166 (旧: 59 R 2951) 《マイクロフィルムからのコピー》
III:4	F	Pf. 4 Hd. Fl. I, II Cl. I, II in B Hn. I, II in F Fg. I, II	印刷譜 (Breitkopf & Härtel, Leipzig, 1802)	パート譜		CZ-Pnm: XIII F 375
			印刷譜 (Breitkopf & Härtel, Leipzig, 1802)	パート譜		CZ-Pnm: II C 19
III:5	Es	Pf. I, II Cl. I, II Hn. I, II Fg. I, II	筆写譜 (第1ピアノのパート譜のみ現存 (III:6の編曲?))	パート譜	プロウモフ修道院	CZ-Pnm: XXXVIII C 281
III:6	Es	Pf. I, II Cl. I, II in B Hn. I, II in Es Fg. I, II	自筆譜	パート譜		D-B: Mus. ms. 13 795/3 《マイクロフィルム》
			筆写譜	パート譜	プロウモフ修道院	CZ-Pnm: XXXVIII C 281
III:7	D	Cemb. I, II, III Ob. I, II Cl. I, II in A Hn. I, II in D Fg.	筆写譜	パート譜		D-B: Mus. ms. 13795 《マイクロフィルム》

脚注：

- ¹ Alexander Schunka, "Konfession und Staat und Migration im Alten Reich", in: "Handbuch Staat und Migration in Deutschland seit dem 17. Jahrhundert", Herg. von Jochen Oltmer, Berlin 2016, S. 140
- ² Charles Burney, "Tagebuch seiner Musikalischen Reisen Durch Böhmen, Sachsen, Brandenburg, Hamburg und Holland, Mit einigen Zusätzen und Anmerkungen zum zweyten und dritten Bande", Hamburg 1773, p. 1
- ³ Národní muzeum – České muzeum hudby, Karmelitská 2/4, 118 00 Praha 1 チェコ共和国
- ⁴ Günther Grünsteudel, "Bähr blies wie ein Gott" – Der Klarinettist Franz Joseph Beer (1770-1819), in: Rohrblatt 23, Falkensee 2007, p. 155
- ⁵ ピアノ教育用として演奏されるソナチネの作曲者として有名。しばしば混同される、モーツァルトと親交が深かったフランティšek・クサヴェル・ドゥシšek František Xaver Dušek (1731-1799) とは別人。
- ⁶ 例えば、ヴァルトシュテイン宮殿は国会、旧市街広場に面するキンスキー宮殿、プラハ城正門前の広場に面するシュヴァルツェンベルク宮殿は美術館。
- ⁷ 1787 年 1 月 15 日モーツァルトの手紙, Wilhelm A. Bauer, Otto Erich Deutsch, *Mozart Briefe und Aufzeichnungen* Gesamtausgabe in 7 Bänden IV, Kassel 1962
- ⁸ ピアノソナタ第 21 番 C-Dur op.53 はフェルディナント・エルンスト・フォン・ヴァルトシュタイン Ferdinand Ernst von Waldstein-Wartenberg (1762-1823) に献呈、フランツ・ヨーゼフ・マクシミリアン・フォン・ロブコヴィッツ Franz Joseph Maximilian Fürst von Lobkowitz (1772-1816) はベートーヴェンの庇護者で、交響曲第 3 番 Es-Dur op. 55 は、1804 年、プラハ北方の街ラウドニツェ Roudnice nad Labem にあるロブコヴィッツ宮殿で非公開初演され彼に献呈された。
- ⁹ 1796 年、1798 年に 1 回ずつ、1811 年、1812 年にそれぞれ 2 回ずつ。
- ¹⁰ Jan Racek, "Pražské pobyty" (プラハの滞在), "Beethoven v Čechách" in: "Beethoven a české země", Praha 1964, p. 25
- ¹¹ 自身が作曲した作品も残されており、また、モーツァルトやミズリヴェーチェックとも親交があり、膨大な楽譜コレクションは国立音楽博物館に所蔵されている。1811 年にプラハコンセルヴァトワール設立の後、パフタの宮廷楽団は解散した。
- ¹² 1777 年、ヨセファの母の出身地、ザルツブルクでモーツァルトと会う。Gabriela Kalinivá, Adam Hnojil a kol., "Malostranský hřbitov historie a současnost" (マロストランスカー墓地 歴史と現在), Praha 2016, p. 258
- ¹³ Václav Jan Sýkora, *František Xaver Dušek. Život a dílo*, Prag 1958, p. 214-234
- ¹⁴ Jiří Mikuláš, "Der Prager Komponist Vinzenz Maschek (1755-1831) und Sachsen", in: Musiker-Migration und Musik-Transfer zwischen Böhmen und Sachsen im 18. Jahrhundert, Institut zur Erforschung und Erschließung der Alten Musik in Dresden 2012, Dresden 2013, (Mikuláš 2013), p. 103
- ¹⁵ Gottfried Johann Dlabacz (Bohumír Jan Dlabac), "Allgemeines historisches Künstler-Lexikon für Böhmen und zum Theil auch für Mähren und Schlesien", Prag 1815, sp. 267
- ¹⁶ Mikuláš (2013), p. 104-105
- ¹⁷ Dlabacz, sp. 267, "Hierauf besuchte er die berühmten Städte Deutschlands mit dem böhmischen Kavalier Grafen von Wrthby, und ließ sich zu Berlin, Dresden, Halle, Leipzig, Hamburg, sowie auch später zu Kopenhagen mit vielem Beifalle hören"
- ¹⁸ 「東インド会社の貿易船」"Der Ostindienfahrer", 作品は消失、1790 年プラハで初演 (?), 「鏡の騎士」"Der Spiegelritter", 作品は消失、1794 年 3 月 9 日プラハで初演、プラハいづれもドラバツの記述に記載、Gottfried Johann Dlabacz, "Allgemeines historisches Künstler-Lexikon", Prag 1815, Band II, Sp. 268、イシー・ミクラーシュによる作品目録、Jiří Mikuláš, "Vinzenz Maschek (1755-1831) – Život a dílo Vinzenz Maschek (1755-1831) – Life and Work" (Mikuláš 2011), p. 868-869
- ¹⁹ 22 のミサ曲、4 曲のレクイエムを始め、グラドゥアーレ、オッフエントリウム、パストラル、モテト、リタニアなど数多くの教会音楽作品を残している。
- ²⁰ Mikuláš (2011), pp. 337-930
- ²¹ 1806 年プラハ初演の記録がある, Mikuláš (2011), p. 371,
- ²² Mikuláš (2011), pp. 542-552

- ²³ Heinrich Christoph Koch, "*Harmonia*", "*Musikalisches Lexikon, welches die theoretische und praktische Tonkunst, encyclopädisch bearbeitet, alle alten und neuen Kunstwörter erklärt, und die alten und neuen Instrumente beschrieben, enthält*", Frankfurt 1802, Sp. 738-743
- ²⁴ D-B: Mus. ms. 13795, 1805年に街区番号変更により178番となる。
- ²⁵ Mikuláš (2011), p. 58
- ²⁶ 現在、マラー・ストラナには多くの大使館があり、国会議事堂、財務省など官公庁も多い。
- ²⁷ Mikuláš (2011), p. 58
- ²⁸ ナウマン、ヴラニツキー、フオーグラー
- ²⁹ "...schade daß der 4^{te} Capellmeister Hoffmeister den ich herzlich grüße und bald hier erwarte, nicht zugegen war.", Mikuláš 2011, p. 53
- ³⁰ Mikuláš (2011), p. 53
- ³¹ モーツァルトの「レクイエム」KV626が演奏された。
- ³² Kalinivá, p. 377
- ³³ CZ-Pst (現: CZ-Pnm): TP 690, Mikuláš (2011), p. 75, p. 548 (CZ-Pst: ストラホフ修道院, CZ-Pnm: チェコ国立博物館附属音楽図書館)
- ³⁴ Mikuláš (2011), p. 548
- ³⁵ Kalinivá, p. 395
- ³⁶ Kalinivá, p. 258
- ³⁷ Katsuki Ichikawa, "*Die Harmoniemusik am Hof von Oettingen-Wallerstein*", Diss. Halle 2015, p. 1
- ³⁸ Joseph Sonnleithner, *Wiener Theater Almanach des Jahres 1794*, Wien 1794, pp. 173-174
- ³⁹ Achim Hofer, "*Was ist 'Harmoniemusik'? Annäherungen an eine Antwort*", in: TIBIA 1995, p. 579
- ⁴⁰ Ichikawa, p. 21
- ⁴¹ ここではホルモニウムジークと管楽パルティータは同義語として扱う。
- ⁴² Dlabacž, sp. 352
- ⁴³ 市川克明, 「モラヴィア兄弟団の管楽アンサンブルについての一考察」, 愛媛大学教育学部紀要. vol.62, p.67-78
- ⁴⁴ CZ-Pnm: XXII C68-73, C119-156
- ⁴⁵ CZ-Pnm: XXII D228-252
- ⁴⁶ CZ-Pnm: XXII A33-77
- ⁴⁷ CZ-Pnm: XXII A194-251
- ⁴⁸ CZ-Pnm: XXII B79-82
- ⁴⁹ CZ-Pnm: XXII B240-264
- ⁵⁰ CZ-Pnm: XXII C38-43
- ⁵¹ CZ-Pnm: XXII D190-198
- ⁵² CZ-Pnm: XXII E46-59
- ⁵³ プラハ国立博物館附属音楽図書館のパフタ伯爵家伝承の楽譜カタログ CZ-Pnm: XXII による。
- ⁵⁴ "*Nachricht: Ueber den Zustand der Musik in Böhmen*", in: "*Allgemeine musikalische Zeitung*" 1800. 4. 9, Leipzig 1800, Sp. 493
- ⁵⁵ Václav Jan Sýkora, "*František Xaver Dušek Život a dílo*", Prague, 1958
- ⁵⁶ CZ-Pnm: XII E343, XX F106, XXII C38-43
- ⁵⁷ Mikuláš Mik. VM V:7 など, Mikuláš (2011), p. 379, CZ-Pnm: XX F13
- ⁵⁸ 1808年設立、1811年から授業開始。
- ⁵⁹ 1862年設立、マラー・ストラナに本部がある。
- ⁶⁰ Petr Macek, "*Český hudební slovník osob a institucí*", Praha 1965, p. 812
- ⁶¹ その後、1972年、社会主義政権のもとでプラハ芸術協会は解散するが、1990年、ビロード革命後再結成され、現在でも活発な芸術活動を行なっている。

- ⁶² Mikuláš (2011), pp. 355-366, 表「ヴィンツェンツ・マシェクの管楽伴奏付きチェンバロ・クラヴィーア協奏曲」参照。
- ⁶³ *Concert en Eb Pour Forte Piano Principale Avec 2 Clarinett en B, 2 Cors en Eb, 2 Fagott*, 1802 年ごろ作曲、H-KE: Sig. 0/139
- ⁶⁴ CZ-Pnm: XXXVIII C 281, 現時点ではどちらがオリジナルかは特定できない。
- ⁶⁵ III:5, III:6 は共通素材の楽曲である。以下この注釈は略。
- ⁶⁶ Ichikawa, pp. 232 ff.
- ⁶⁷ 当該協奏曲のタイトルは「パルティア」であり、その意味ではメヌエットを中間楽章に用いることは多い。
- ⁶⁸ Mikuláš 2011, pp. 482-484
- ⁶⁹ ブライトコプフ出版プレート番号、Mik. VM III: 4 は 111、Mik. VM XIII: 5 は 99 である。Mikuláš 2011, p. 361, p. 482-484
- ⁷⁰ CZ-Pnm: XIII F 375, CZ-Pnm: II C 19, 楽譜資料参照
- ⁷¹ "Nachrichten Strassburg", in: "Allgemeine musikalische Zeitung" 1822. 8. 28, Leipzig 1822, Sp. 565
- ⁷² "Nachrichten Strassburg", Sp. 565
- ⁷³ Mikuláš (2011), pp. 355-359
- ⁷⁴ 高齢で療養中のため直接の調査は不可能であった。
- ⁷⁵ Mikuláš (2011), pp. 355-359, ミクラーシュ氏のカタログでは、旧番号が記載されている。
- ⁷⁶ CZ-Pu: 59 R 4099 (CZ-Pu: チェコ国立図書館)
- ⁷⁷ CZ-Pu: XR 165 (旧: CZ-Pu: 59 R 2950)
- ⁷⁸ CZ-Pu: XR 164 (旧: CZ-Pu: 59 R 2949)
- ⁷⁹ CZ-Pu: XR 166 (旧: CZ-Pu: 59 R 2951)
- ⁸⁰ CZ-Pu: XR 164
- ⁸¹ <https://www.antikvariatsmotyl.cz/gramodesky/vaclav-vincenc-masek-1.html>, 2017.10.27
- ⁸² 今後シェスターク氏所蔵の楽譜を比較できれば解明に近づくものと思われる。
- ⁸³ D-B: Mus. ms. 13795/3 (D-B ドイツ国立図書館 : ベルリン)
- ⁸⁴ マラー・ストラナ Malá Strana
- ⁸⁵ Mikuláš (2011), pp. 364
- ⁸⁶ CZ-Pnm: XXXVIII C 281
- ⁸⁷ Broumovský klášter
- ⁸⁸ CZ-Pnm: XXXVIII C 281, 楽譜資料参照
- ⁸⁹ Viktorie Dědečková, "Antonín Celestýn Mentzel a hudba v Broumově v 18. století (Anthony Celestýn Mentzel and music in 18th century Broumov)", Mag. Filozofická fakulta Univerzity Karlovy (カレル大学哲学学部), Praha 2014, p. 27
- ⁹⁰ D-B: Mus. ms. 13795
- ⁹¹ <https://www.narodnifonoteka.cz/Record/5445fb5bcb798530238b9217>, 2017.10.27 参照

